

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 南 明世

論文題目 行為の過程から見る日本語の失敗を表す複合動詞  
の研究  
—中国語との対照から—

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 杉村泰  
委 員 名古屋大学教授 丸尾誠  
委 員 名古屋大学准教授 志波彩子

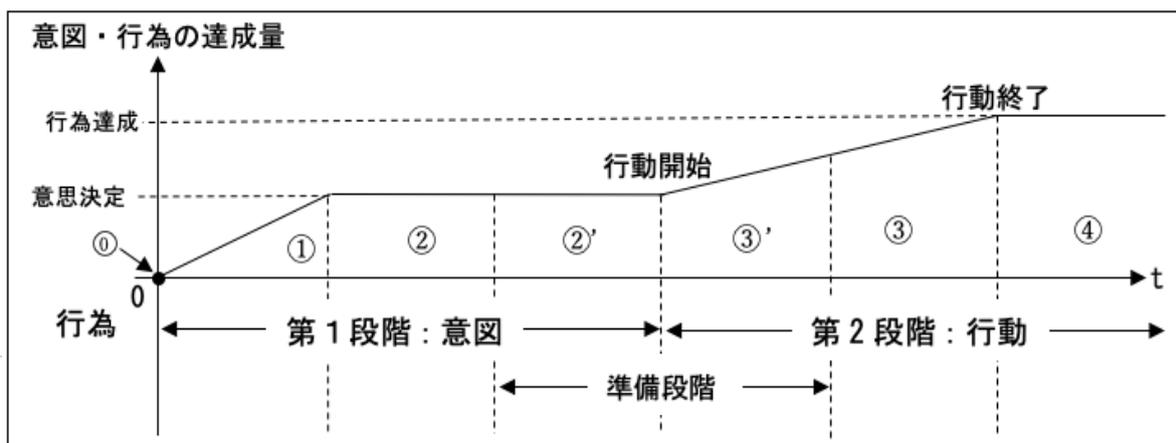
**【本論文の概要】**

本研究は日本語の失敗を表す複合動詞「V1-忘れる」、「V1-損なう」、「V1-損ねる」、「V1-損じ(ず)る」、「V1-逃す」、「V1-そびれる」、「V1-落とす」、「V1-漏らす」、「V1-間違える」、「V1-間違う」、「V1-違える」、「V1-違う」、「V1-誤る」の意味について、対応する中国語と対照しながら論じたものである。従来の複合動詞研究では、前項動詞 (V1) と後項動詞 (V2) の結合規則について複合動詞全体を大まかに見たものや、個別の複合動詞の用法について見たものはあったが、「失敗を表す複合動詞」というカテゴリで体系的に論じたものはほとんどなかった。また、複合動詞の分析に関しては、主に①本動詞と複合動詞の意味的な対応、②共起する V1 の特徴、③V1 と V2 の格関係の 3 つの観点からなされており、「行為の過程における位置づけ」という観点が希薄であった。これに対し、本研究では日本語の失敗を表す複合動詞 13 語を対象に、それぞれの語が行為の過程においてどの段階での失敗を表すかという観点から分析し、失敗を表す複合動詞の体系化を行った点で独創的で優れた研究である。本論文は序論と結論の章を含め、全部で 9 章からなる。

「第 1 章 序論」では、本研究の目的として失敗を表す複合動詞について行為の過程から体系的に考察することを提示している。その上で本研究の課題として、①「忘れる」と「V1-忘れる」など本動詞と複合動詞の対応を見る、②各複合動詞における共起する V1 の違いを明らかにする、③各複合動詞における行為の過程の違いを明らかにする、④“忘-V1”など対応する中国語と対照することにより日本語の失敗を表す複合動詞の特徴を明らかにすることを示している。

「第 2 章 複合動詞に関する先行研究」では、複合動詞に関する先行研究を概観し、本研究における分析の立場を示している。すなわち、①本動詞と複合動詞の対応に関しては、先行研究では「V1-忘れる」と「V1-落とす」以外の表現の考察が不十分であり、これらについても考察する必要があることを指摘している。②共起する V1 について先行研究では断片的な記述しかされていないため、現代日本語書き言葉均衡コーパスを利用して、各複合動詞の違いを比較することを述べている。③先行研究では行為の過程におけるどの段階での失敗かという観点が欠けているため、この点を明らかにする必要があることを主張している。④更に中国語と対照することにより、上記①～③の特徴についてより詳細な記述ができることを主張している。

「第 3 章 行為の過程における失敗」では、失敗を表す複合動詞の考察の前提として、以下の図を使って、本研究で考える行為の過程について論じている。



これは行為の過程を大きく「～しよう」と思ってから行動を開始するまでの「第一段階：意図段階」と、行動を開始してからその行動が終了し、その後その結果が残るまでの「第二段階：行動段階」の2つの段階に分類し、それぞれを更に2つの段階に分けて考えるものである。これにより、各複合動詞の意味の違いを体系的に論じることを可能にしている。

また、中国語と対照することにより、行動に移す前の②の段階と行動を開始した後の③の段階の間に準備段階があることを主張している。これは例えば「買う」であれば、「買う対象物を探す」などの段階である。中国語ではこの準備段階も“买”（買う）で表すことができるのに対し、日本語では「買う」とは言わず、「探す」など別の動詞で表される。その上で、このような違いが失敗を表す複合動詞の使い分けにも影響していることを指摘している。例えば、同じタイミングを逃したという意味でも「行きそびれる」は「行こうと思っていたが行けなかった」という意味を持ち、意図段階でも行動段階に近い②'の段階（準意図段階）での失敗であるのに対し、「行き損なった」は行くための準備を行い、今まさに家を出る場面での失敗を表すため、準備段階でも行動段階に近い③'の段階（準行動段階）の失敗であるという違いがあることを指摘している。

「第4章 「V1-忘れる」」では、「V1-忘れる」は「言う」「食べる」といった動作動詞と共起すると②の段階の失敗である「～することを失念する」という意味を表すのが基本であるが、「置く」と共起して④の段階の「～したことを失念する」という意味を表したり、「見る」と共起して「～したのを覚えていない」という意味を表したりすることを指摘している。また、補文形式の「V {の/こと} を忘れる」とも比較し、補文形式の場合は①段階の失敗として「～すべきであったのに、そのチャンスを逃してできなかった」という意味や③段階の失敗として「～していることを失念する」という意味を表すことも指摘している。さらに中国語では①段階から④段階の失敗全てを“忘-V”で表し、日本語より使用範囲が広いことを指摘した。

「第5章 「V1-損なう」「V1-損ねる」「V1-損じ(ず)る」」では、「V1-損なう」と「V1-損ねる」は「見る」「食べる」といった他動詞や「乗る」「行く」といった自動詞と共起し、③'段階の失敗として「～しようと思っていたが、タイミングを逃してできなかった」という意味を表し、③段階の失敗として「～したことはしたが、対照行為が質的・量的に期待通りの結果にならなかった」という意味や「見損なう」の形で「相手の評価が想定より低い」という意味を表すことや、「死ぬ」と共起して①段階の失敗である「危うく～するところだった」という意味を表すことを指摘している。一方、「V1-損じ(ず)る」は主に「書く」「する」と共起し、③'段階の失敗として「～しようと思っていたが、タイミングを逃してできなかった」という意味や③段階の失敗である「～したことはしたが、対照行為が質的・量的に期待通りの結果にならなかった」という意味を表すことを明らかにしている。さらに中国語では①段階の「危うく～するところだった」は“差点儿V”と、③'段階の「～しようと思っていたが、タイミングを逃してできなかった」は“没能V”あるいは“没-V-「結果補語」{成/到/掉}”、③段階の「～したことはしたが、対照行為が質的・量的に期待通りの結果にならなかった」は“V-错”で表すことを指摘している。

「第 6 章 「V1-逃す」「V1-そびれる」」では、「V1-逃す」は「見る」や「聞く」「売る」といった情報や物を手に入れる意味をもつ動作動詞と共起し、②の段階の失敗である「～しようと思っていたが、タイミングを逸したためできなかった」という意味を表し、③の段階の失敗である「～したことはしたが、対象を捕らえきれず、タイミングを逸したためできなかった」という意味や「犯罪を見逃す」のような「気づいていながら見ないふりをする」という意味を表すことを明らかにしている。一方、「V1-そびれる」は「言う」「聞く」といった情報や物を手に入れる意味をもつ動作動詞や「寝る」「帰る」といった人の意志的な変化を表す自動詞と共起し、②' 段階の失敗として「～しようと思っていたが、タイミングを逸したためできなかった」という意味を表すことを明らかにしている。さらに中国語ではこれらの意味を主に“没-V-「結果補語」{成/到/掉}”で表し、②および③の段階の失敗は“V-漏”でも表すことができることを指摘している。

「第 7 章 「V1-落とす」「V1-漏らす」」では、「V1-落とす」は「見る」や「聞く」といった言語活動に関係する動詞と共起し、③段階の失敗として「事柄の一部に気がつかず、～することができなかった」という意味を表し、「V1-漏らす」は「聞く」「書く」といった言語活動に関係する動詞と共起し、③段階の失敗として「事柄の一部に気がつかず、～することができなかった」という意味や「あと少しで～することができなかった」という意味を表すことを指摘している。さらに中国語では「V1-落とす」に対応する意味は“没-V-「結果補語」{成/到/掉}”で表し、「V1-漏らす」に対応する意味は「事柄の一部に気がつかず、～することができなかった」の意味の場合は“V-漏”あるいは“漏-V”で表し、「あと少しで～することができなかった」の意味の場合は“没能V”で表すことを指摘している。

「第 8 章 「V1-間違える」「V1-間違う」「V1-違える」「V1-違う」「V1-誤る」」では、「V1-間違える」は「見る」「聞く」といった言語活動に関係する語と共起し、「V1-間違う」は主に「見まかる」の形で使用され、「V1-違える」は主に「見る」と「とる」と共起し、「V1-違う」は主に「すれ違う」や「食い違う」の形で使用され、「V1-誤る」は主に「見る」と共起し、③段階の失敗である「正しく行くべきところを誤って別のことをしてしまった」という意味や「正しいものと正しくないものを取り違えて、正しくないことをしてしまった」という意味を表すことを明らかにしている。また、副詞的用法の「間違えてV」「間違ってV」「誤ってV」とも比較し、これらは①の段階での失敗であることを明らかにしている。さらにこれに対応する中国語は複合動詞の用法は“V-错”で表し、副詞的用法は“错-V”で表すことを指摘している。

「第 9 章 結論」では、本研究の成果についてまとめ、残された課題について述べている。

### 【本論文の評価】

本論文は、以下の各点において審査委員から高く評価された。

- 1) 失敗を表す日本語の 13 語の複合動詞について、「行為の過程」という観点から統一的に説明することにより、これらの複合動詞の体系化を行った点で、先行研究を超える独創的で優れた研究である。
- 2) 中国語と対照することにより、日本語の行為の過程の中に「準備段階」のあることを指摘し、失

別紙 1 - 2

敗を表す複合動詞の違いについて詳細な記述を行うことを可能にした。

3) 現代日本語書き言葉均衡コーパスを利用して共起する動詞の違いを見ることにより、各複合動詞の間の意味の違いのみならず、同一形式の中の多義的意味について、行為の過程との関連から詳細に論じている。

一方、審査員から以下のようなコメントもあった。

1) 議論の中心が「行為の過程」における位置づけに偏り、共起する動詞のアスペク的な意味との関連からの議論が不十分である。

2) 日本語の複合動詞の特徴を見るために対応する中国語の表現と対照しているが、中国語の失敗を表す表現についての議論が十分だとは言えない。

このように本論文には、不十分と思われる箇所も見られる。しかし、本研究は先行研究を大きく超えるものであり、日本語の複合動詞研究において重要な位置を占めるものである。全体的に見た場合、本論文は論旨が整然としていて、完成度の高い優れた論文であると言える。

以上の評価に基づき、審査委員全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。